



私のヒマラヤ登山

会員 米田 龍玄 (58期)

写真は、ネパールのタルプチュリ峰（5663m）登頂目前、肩のあたりから撮影したものである。ヒマラヤ山脈の一角アンナプルナ保護地域にある。アンナプルナI峰（8091m）、ガンガプルナ峰（7455m）、アンナプルナIII峰（7555m）など7000～8000m級の山々に囲まれ、迫りくる壮大な景色を望むことができる。

訪れたのはゴールデンウィーク。カトマンズからプロペラ機でボカラへ行き、アンナプルナ街道の起点の村まで車で移動。そこから4日かけ、高所順応を兼ねたのどかな田舎街道のトレッキングである。アイゼン・ピッケル、防寒具その他の装備はポーターが運んでくれる。ポーターは30kg以上あるバックを紐で括り、その紐をおでこにひっかけてサンダル履きで運んでいく。

街道には宿場村が点在する。宿で食べるネパール料理も遠征の醍醐味である。代表的料理はダルバート（豆カレー）、モモという小籠包のようなものやチョーメンという焼きそばのようなものなど、どれも美味しい。熱くて真似はできないが、ポーターたちは器用に手指を使って食べていた。

街道を進むに連れ、雄大で美しい大迫力の山々が現れる。ベースキャンプの高度は4100m。既に富士山を超えている。そこから、氷河を超え、乾季の荒涼とした山を登っていく。アタックキャンプに着くころには、高山病の徴候が表れる者もいた。カロリーメイトでエネルギー補給し、仮眠。午前3時ころ、ヘッドライトを付けて出発した。酸素濃度は、平時の約半分である。動くとすぐに息が上がる。5000mを超えた頃、急激な頭痛に見舞われ、たまらずバファリンを1錠飲んだ。だんだんと空が白み、周りの山々が姿を現す。朝焼けで赤く染まった山並みは威厳に満ち、神の存在を彷彿とさせる。

開けた場所に出た。ここは雪下に氷床帯があり、クレバスと呼ばれる深い割れ目に落ちれば再び太陽を見ることはない。ザイルで身体を結び歩を進める。氷床帯を



抜けると、目の壁のような急坂を登ればあと一息だ。急登箇所には、現地ガイドが先にフィックスロープを設置している。足を滑らせても滑落しないよう、ユマール（登高機）を付け、アイゼンを雪面に食い込ませ、幅数十センチの雪塊にしがみつくように登る。周りに雲が漂い始めると、あっという間に視界が真っ白になる。雲の切れ間から下界が見え、切り立った崖の高度感に足がすくむ。とにかく登り、山頂とおぼしき雪塊に到達した。一瞬の晴間があり、まるで空に浮いているような錯覚を覚える。記念写真を撮り、喜びをかみしめる間もなく下山。5000mとはいえ、危険な高度からは速やかに退散する。

アタックキャンプに戻るとポーターたちが揉めている。ひとりが寒いだか高山病だかで下山してしまったそう。ビバークをするか、下山するか。悩んだ末、下山を選んだ。日が暮れ、ヘッドランプを頼りに氷河まで下りたが、行きは明瞭だった道が真っ暗で全く分らない。現地ガイドも右往左往し、遠くに明かりが見えたときには既に23時。なんと、この日は20時間近く行動していた。飲み物も食べ物も尽き、疲れ切った僕たちに、宿の人が持ってきてくれたレモンティーの味を、一生忘れないだろう。

*表紙裏「リブラギャラリー」に関連するカラー写真を掲載しています。